

望郷の樺太、銀河鉄道の夢
ー サハリン汽車旅ロマン紀行 ー

「幸せ求め、最果ての地に、それぞれ人は、明日を祈る」、かつてのヒット曲、「宗谷岬」を口ずさみ、人生の幸せを求めて、最果ての地へと赴いたのは、平成21年8月7日の夕刻であった。札幌で学生生活を送る長男のもとを訪れるという目的も兼ねての旅だ。カラッとしたさわやかな気候と大自然が広がる北海道には、クラーク博士の「Boys be ambitious」の言葉が本当に似合う。今回は、富山から新潟まで高速バスで行き、新潟から苫小牧までフェリーに乗り、さらにバスで札幌に入り、長男の下宿に一泊。翌日は特急スーパー宗谷で稚内へ移動、快晴のもと、レンタカーでドライブした。稚内公園、北防波堤ドーム、ノシャップ岬、サロベツ原野の絶景を堪能、感動のうちに宗谷岬へ向かう。43Km先にサハリン（樺太）の島影が望める宗谷海峡、そこには多くの人々の様々な思いが詰まっている。かつて日本領だった南樺太、40万人もの日本人が生活し、亡き妹、トシの魂を求めて、宮澤賢治も傷心の旅で訪れた望郷の大地。だが戦後はソ連領サハリンとなり、日本人の大半は引き揚げた。我が家の向かいのおばあさんも樺太からの引揚者だ。終戦前後のソ連軍侵攻の混乱で不幸にも樺太の土となった人たちへの慰霊の言葉は、今も稚内公園の「氷雪の門」や「九人の乙女の像」などに痛ましい記憶とともに刻まれている。さらに戦後は40年以上、東西冷戦の最前線としてにらみ合い、民間人の往来など考えられなかった。今回はその宗谷海峡を横断し、サハリンへ渡ろうという旅である。

ソ連崩壊後、ロシアは資本主義国となり、サハリンへも自由に渡航できるようになった。「宗谷岬」の歌詞のごとく、時の流れは人々の心を氷解させる。「人の心の扉を開き、海鳴りひびく、宗谷の岬」というのが現在の姿である。

8月10日朝、礼文島観光に向かう長男を見送った私は向かいの国際ターミナルへ向かう。国内ターミナルよりはるかに小さい。船も小さく、国際航路とはとても思えないが、大勢のロシア人が異国の旅という現実を納得させてくれる。日本人は10名程で少ないがさほどの緊張感はない。ロシアは2回目だ、5年前のシベリア鉄道の旅が忘れられず計画したサハリン汽車旅なのだ。酷寒の気候に耐えて生きるロシア人は無愛想だが心根は温かく親切な人が多い。厳しい風土で助け合っているからだろう。旅そのものもバウチャーシステムで事前予約、支払いにビザ取得も全て完了している。安心な上に現地であまりお金を遣わない。安全で経済的な旅なのだ。

10時に稚内を出航して2時間後、国境を越えてまもなく、ついに左手にサハリンの島影、クリリオン岬が見えた。異国の大地が眼前に広がり感動的だ。ついに来た樺太、興奮して船室に戻り乗客と話す。女性ペアは、宮澤賢治の足跡を辿る旅で、賢治が「銀河鉄道の夜」の中で書いた「白鳥の停車場」のモチーフとなった「白鳥湖」でバーベキューとのこと。ロシア語全くダメというのは少々心配になる。

船旅5時間半、船はコルサコフ（大泊）港に接岸、栈橋は日本時代のものだ。高台にはロシア風集合住宅が並ぶ。宗谷バスの中古（かなり年代物）で栈橋を渡り、稚内と対照的な古びた建物で入国審査を受ける。早速の「ザ・ロシア体験」だ。審査をパスし、荷物検査とセキュリティーチェックを受け、観音開きのドアが開くと、ようやくロシア側の待合室に出た。ヤーナさんとい

う東洋系の美人が「RAIJO」の札を示している。挨拶して日本人ですかと尋ねるが、ロシア人だという。三ヶ月以内に留学経験があり、日本語は達者だ。国立サハリン大学の学生だそうで確かに才媛の雰囲気がある。私の他にFさんという男性と車に乗る。かなり乱暴な運転で少々怖かったが、40分ほどでユジノサハリンスクへ到着。ホテルにチェックインした後、Fさんと高級ロシア料理のレストランに入った。ボルシチの美味かったこと、さすが本場だ。シショット（支払い）の際、「フクースナ、ハラショー バリショーエ スパシーバ（とてもおいしかった、どうもありがとう）」と声をかけると、「パジャルースタ（どういたしまして）」と返って来た。通じた、気持ちがいい。

8月11日、いよいよ汽車旅だ。喜んで駅へ向かうと、ビールを飲みながら青年が話しかけてくる。タカリだと直感した。駅舎へ入ってもKACCA（出札所）を教えようとするなどしつこくついてくる。適当に相手にしていると、ついに「マネー」と言い出した。「ニエツト、ニエツト（だめだめ）」と連呼したら、様子を察知した警官が近寄って来て、男は逃げるように退散した。駅周辺はたかられると聞いていたが、早速実体験だ。こういう一面も「ザ・ロシア」である。

さて8:15発に乗るのだが、貨物列車しかない。近くの人に切符を見せて聞いたら、はるか遠くを指差すので貨車の横を歩いていくと、機関車と貨車の間に2両だけ客車がつないである。日本にはない貨客混合列車だ。ホームも低く、皆平気で線路を横切る。日本だったら大目玉だ。線路の幅はロシア本土とは違い、日本と同じ狭軌だ。かつてここが日本だった証でもある。

列車は定刻に発車、目的地のスミルヌィフ（気屯）まで11時間の旅である。のんびり走り、貨物の付け替えで40分停車の駅もある。風景は北海道と大差ないが未開の部分が多く、手付かずの大自然が広がり、その中にダーチャ（別荘）が点在している。共産主義の名残で、ロシア人は皆同じ形のアパートでの集団生活だ。その代わり別荘を持っており、年寄りや週末のダーチャ行きが人生の楽しみだという。なるほどと思ってしまう。

車窓は、途中から右手にオホーツク海が広がり絶景だ。気温は20℃程度というのにマカロフ（知取）という駅では隣の砂浜で大勢海水浴を楽しんでいる。すごい体格のおばさんもビキニ着用だ。ファッションというより日光浴が目的なのだろう。恐るべしロシア人だ。

16時過ぎ、列車はポロナイスク（敷香）に到着。かつて霧の町と言われた日本最北の民間人居住の街だ。昭和の大横綱、大鵬の生まれ故郷でもある。47分停車なので町まで歩く。小雨で、未舗装の道はぬかるみ、建物はボロボロ、駅舎のみ新築されてピカピカ、高度成長前夜の日本みたいな状況だ。列車に戻ると、ホームもない線路脇で乗客が車掌を囲んで井戸端会議の真っ最中、何とものんびりした光景だ。ここには日本人が忘れてしまった何かがある。人の幸せは物の豊かさや便利さだけではないと改めて思う。

19時02分、列車は旧国境、北緯50度の南25キロの地点のスミルヌィフ（気屯）に到着、下車する。この異国の田舎町で深夜まで4時間過ごす。こんな日本人が他にいるだろうかと思ながらあきれる。待合室の向かいには登山用具を抱えた若者グループが時折「ビンゴ！」とか言って楽しそうだ。心がなごむ。

23時30分、帰りの寝台急行サハリン号が到着。サハリン唯一の急行で車内もきれいだ。私の部屋にはロシア人の父と子供二人、11歳のミハイル君と5歳のウラジミール君だ。この先のティモフスクという町に住むおじいちゃんを訪ね、明日飛行機でハバロフスクへ戻るといふ。私に

「チャイニーズ？、ジャパニーズ？」と英語で尋ねたお父さんは、ジャパニーズの答えに嬉しそうで、ベッドメイクもしてくれた。仕事で札幌、小樽、新潟へ行ったことがあるという。30分ほど話したが疲れもあり「イズビニーチェ、アイムスリーピー、スパコーイナイ ノーチ（すみません、眠いのでおやすみなさい）」と英語とロシア語のチャンポンで言うと「ノープロブレム」と電灯まで消してくれる。親切で人なつっこい「ザ・ロシア人」ここにありだったが、翌朝驚かされた。何と裸でブリーフ1枚で寝ている。自分は寒くジャンパーまで着込んだのに彼らの体感温度はどうなっているのだろう。今回の旅の「ザ・ロシア体験」ハイライトだった。

8月12日はかつての樺太庁所在地、豊原市、今のユジノサハリンスク市内見学だ。やはり日本時代の建築の樺太庁郷土博物館が最も印象深く、当時の地図や写真、旧国境の礎石も展示されていた。しかし玄関の狛犬は左右反対に鎮座し「あ・うん」ではなく「うん・あ」の呼吸だし、庭石は「伊藤家累代之墓」と刻んだ墓石だ。あ然として眺めていると、ロシア婦人が「イポーニエツ（日本人？）」と声をかけてくる。「ダー（はい）」と答えると何やら尋ねてくる。「この石は何なの？」と聞いているらしく、合掌して墓参りをするポーズをして教えた。日本人として罰当たりなことは嫌だ。ちょっと複雑な気分の「ザ・ロシア体験」だった。

他にも多くの体験があった。徒歩1時間、汗だくになって登った旧旭ヶ丘から眺めた市街の絶景に感動した。旧豊原公園では白鳥のボートを漕ぎ、観覧車も楽しんだ。帰りの空港で間違えて入った国内線ターミナルで迷い「スィヴォドーニャ、ダモイ東京（今日東京に帰る）」と叫ぶ私に、一緒に外まで出て国際線の入り口を教えてくれた警備の兵士にも感謝している。ああここにもみんな家族がおり、誰もが子供に愛情を注いでいる。そして平穏で幸せな生活を楽しんでいる。言葉や民族は違っても、人間らしい生活を望む気持ちは皆同じだと思う。素直な感想である。

空港の待合室で話したおじいさんは、真岡（ホルムスク）生まれだと言う。本人は幼い頃でよく覚えていないが、父母から聞かされた真岡の町を自身で確かめたいと、家族と共に訪れたという。胸が熱くなる。ああここにも歴史に翻弄された生き証人がいる。何と貴重な収穫を多く得られたことかと思う。

帰りは成田空港までひとつ飛び、わずか2時間の空の旅だ。ウラジオストク航空の新型機、ツポレフ 204 の機内から私は心の中で叫んだ。「バリショーエ・スパシーバ、ダズヴィダーニャ、サハリン！」（どうもありがとう さようならサハリン！）。ロマン溢れる樺太紀行となった。



ゴールヌイ ヴォズドフ（山の空気展望台、旧旭ヶ丘）よりユジノサハリンスク市外を望む



ユジノサハリンスク駅をバックに



アヒルのボートから公園をながめる



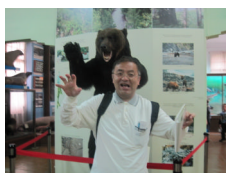
ガガーリン（豊原）公園で、アヒルのボートを楽しむ



豊原公園の中にある遊園地にて



樺太庁郷土博物館をバックに



ヒグマの剥製



旧国境の礎石



樺太時代の生活用具



家紋の入った庭石

樺太庁郷土博物館点描



寝台急行 サハリン号をバックに
ユジノサハリンスク駅にて



樺太庁郷土博物館前

何と、墓石を庭石に利用



ガガーリン（豊原）公園にある
こども鉄道、残念ながらこの日
は営業は休み。試運転のみ。



ヴズモーリエ駅にて 貨物列車と行き違う



ヴズモーリエ駅前風景、この辺りはまだ舗装道路



日本時代を彷彿させる狭軌のレール、広軌に改軌する準備が...



ポロナISK（敷香）遠望、横綱大鵬の生まれ故郷



新築された、ポロナISK駅



午後7時過ぎ、小雨の中スミルヌィフに到着



スミルヌィフ（気屯）駅前風景



寝台急行サハリン号から下車するロシア人乗客



稚内から乗船したアインス宗谷内の時計
日本時間とサハリン時間が共に分かる



コルサコフ（大泊）港に到着



コルサコフ（大泊）港をバックに



コルサコフからユジノサハリンスクは車で移動
このあたりの道路は整備されている。



旧旭ヶ丘へ登山中、道路は未舗装



旭ヶ丘のふもと、勝利広場前から市街地を見る
ユジノサハリンスク駅近くのバザール

